

ホテルのニュースレター

日本ホテルの会 2006/7 第37号

よみがえ

蘇る渡良瀬川と遊水地（前編）

日本ホテルの会理事 川村善治

渡良瀬川は栃木県と群馬県の境界にある皇海山(2,143m)に源を発していて、上流の栃木県の足尾から群馬県の大間々まで険しい溪谷を流れ、桐生市や栃木県の足利市の中心部を流れ藤岡町の渡良瀬川遊水地に入り、ここで巴波川ウズマと思川に合流し、茨城県古河市で利根川に合流する。足尾町から利根川まで107km、海までは約2,311kmで達する。

渡良瀬川上流足尾銅山は、1610年(慶長15年)に農民二人が足尾タテの備前楯山で銅を発見したのが始まりで、足尾銅山は1611年(慶長16年)江戸幕府の直山となり、その後1877年(明治10年)に古川市兵衛が初代の社長となり経営する事になった。明治16年に銅山の発展と共に銅の製錬所が新設され、この時から製錬する時に出る亜硫酸ガスによって煙害が大きくなり、周辺の山々の動植物にも被害が出始めて来た。製錬に必要な木炭を得る為に水源の山々で乱伐を重ねた為に、流域の農作物や魚類まで被害が広がってきた。

たびたび大洪水が起きるために流域の人々



写真1 歴史を語る足尾銅山工場。手前は日本初の道路用鉄橋(古川橋)

の鉱毒防止を求める声はやがて抗議行動というかたちをとる様になった。有名な川俣事件である。1973年(昭和48年)足尾銅山は閉山、1989年(平成元年)製錬所は事実上操業を停止した。現在も足尾の渡良瀬川流域にドイツ人の設計により作られた、日本で最初の記念すべき道路用鉄古河橋と、古錆びた鉄骨の製錬所が歴史を物語っている。

亜硫酸ガスで禿山になった足尾周辺の山々は台風シーズンになると、時々大洪水になる。昭和22年のカスリーン台風では、渡良



写真2 重要文化財・幕府御用銅蔵 慶長15年(1610)建 花輪宿

瀬川流域の桐生市と足利市などで703名の尊い命が亡くなっている。また、足尾町の人口は昭和48年以前は約38,000人だったが、現在では約3,100人と減少している。

足尾の山々は現在日光国立公園に指定されている。以上の出来事から渡良瀬川の河川整備が急速に行われ、足尾砂防ダムを始め数ヶ所のダムと、昭和52年には広い草木ダムが完成した。湖畔には有名な富弘美術館もある。又禿山になった足尾の山々にはボランティア及び小中学生の体験学習によって植樹され、緑が復元し、山々は生気を吹き返した。その為か動植物も増え国指定特別天然記念物のコウシン草(庚申草昭和7年天)という食虫植物が山に群生している。動物ではニホ



写真3 ホタルをよびもどす小夜戸ホタルの会

ンカモシカ(昭和30年天)も生息してる。その外に、ニホンザル、シカ、イノシシ、クマ、などが急激に増加したが、その反面、植林の食害が現在問題になっている。川の上流にはカジカカエルやイワナ、ヤマメ、カジカなどの魚類も多く増え、生息する様になった。

足尾の町の人々にホタルの様子を尋ねると支流の里山の川には以前にはゲンジボタルが多く生息していたが、農薬や護岸工事などで絶滅したのではないかと話をしてくれた。



写真4 氷柱の芸術 黒保根村

渡良瀬川には渓谷にそってすばらしい鉄道と県道がある。鉄道は1912年(大正元年)に80%が開通し、1918年(大正7年)に国有化され全線が開通した。現在は桐生駅から足尾の間藤駅までの全長44kmを、わたらせ渓谷鉄道としてJRの第三セクターが運営し、渡良瀬流域の住民と通学の大事な交通手段となっている。

一方道路は足尾から日足トンネルが開通したので、日光に近く大変便利である。観光シーズンになるとトロッコ電車を走らせ、秋紅葉よりも新緑の五月の連休から下旬にかけて多くの人が訪れる。

大間々駅から乗車すると十分ぐらいで周辺の景観が変わる。渡良瀬川の絶壁を通り、や



写真5 赤城山を背景として流れる渡良瀬川

がて溪谷の川岸に沿って上流へと走る。五月になると水量も増え川底も透明な川の中は、さまざまな色の石が水とのコントラストで実に美しく見える。急流の川瀬では水が大小の石にぶつかり、白波がキラリとあちこちで光る。やがて新緑につつまれ太陽の光を受けた若葉は、まるでステンドグラスのトンネルの様で、美しい色彩が目に入る。また森の中に霏がわき、若葉の間に太陽が差し込むと、薄い虹色が現われ、とても幻想的である。鑑賞にはなるべく晴天の日をおすすめする。

足尾往復は約3時間半かかるがすばらしい新緑の景観を楽しめる。

渡良瀬川は桐生市まで来ると川巾も広く、橋の長さも約400mになる。6～7月はアユが解禁となり、川はアユ釣り人で賑わい、大空ではヒバリが囀る。(以下次号に続く)

◆日本ホテルの会役員交代◆

役員任期の満了に伴いまして、次のように新体制を発足しました。

矢島会長が、退任され、名誉会長に就任しました。会長以下の役員体制は、新しい時代に対応するために刷新し、再任の理事に加え5名の新しい理事が就任いたしました。

本号では、新旧会長の言葉と新理事のうち3名のプロフィールについて紹介します。他の新任理事も順次ニュースレター紙上にて紹介してまいります。

■日本ホテルの会新体制

名誉会長	矢島稔
会長	本多和彦
副会長	鈴木浩文
理事	小西正泰・川村善治・常喜豊・井上久彌・井上務・荻野昭・小俣軍平 古河義仁・渋江桂子・山口孝

日本ホテルの会は未来へのかけ橋

日本ホテルの会名誉会長 矢島 稔

年をとったせいかな近頃、社会の変化の激しさには驚くばかりである。

ケータイは電話だった筈だが、カメラでナビゲーターでパソコンでビデオまでとれ、テレビが見られ時計もついて手紙も交換できる。

少し前に「大きい事はいいことだ」という言葉と考え方が流行したが、今になれば尺度が違う。これ程IT技術が進歩すると、この先どうなるのか予想するのも難しい。

では人は本当に賢くなっているかというと、同意できない事ばかりが世界中でおきている。

テロという理由で戦いを続け、人口の激増で餓死者が多くなり、京都議定書を決めているながら、生産のために大国は二酸化炭素をより多く出しつづけ、それを守ろうともしない。

最近、「昆虫の森」で企画展「かくれる虫・さがし出す鳥」を始め、昆虫は天敵特に野鳥

に常にねらわれている存在だから、カムフラージュという方法で生きのびてきた。つまりこれは天敵によって選択された結果で、虫の意志ではないという事を知ってもらう例を生きたものや標本を使って展示している。

一方、野鳥の中には昆虫食の種類が多く、成鳥が木の実などの植物食でも、ひなを育てる時には殆ど昆虫をさがして与えるので全てが虫の天敵と考えていいだろう。

ところで野鳥は昆虫をどの位食べるのかというデータを探したが、近頃この種の発表は殆どないことを鳥の専門家から聞いた。そして、最も信頼できるのは山階鳥類研究所を創設された山階芳麿博士の調査結果しかないという。先生の著書の中にはドイツのレーリッヒ博士によるカウント法を直接学び、それに基づいて日本のシジュウカラ(スズメよりやや小さい)の補食をカウントした結果が示されている。それによると1羽が1年間に食べる虫の数は12万5000匹という。1か月に1万匹以上食べないと1年間生きていられないというから、もし5年生きていれば62万5000匹の虫を食べているわけである。

もう一つ興味深い話を聞いた。愛鳥家で野鳥を間近に観察したいし、特に育雛の状態を調べたいので巣箱を造って近くの林に設けた。

順調に雛が育って巣立ったのを見とどけてから、その人は昆虫にも興味をもっているので虫の観察をしてがく然としたという。

驚く程周囲の昆虫が減っていて、目指す種類は殆どいなくなっていたのに気づいたという。つまり自然界は食物連鎖ですべてつながっていて、人間だけが独自の経済システムを創り上げ、自然と何の関係をもたなくても

生きていける例外的な存在である。唯本来の意識をもっていれば、その発想で何をすべきかを考えるはずである。しかし、都市化と文明(便利さ)に埋もれた人たちは「自然は必要な」と真顔で聞いてくる程汚染されている。

先程の巣箱をかけて観察した人は直ちにそれをはずすことで昆虫観察が続けられるようになったという。虫と鳥のつながりを知るためにひと時巣箱をかけるのはいいが、いつまでも、そして毎年子供たちに巣箱をかけることが良い事として行なわれたら、その周辺の昆虫は殆どいなくなってしまうのは確実である。

日本ホタルの会は人が手を入れなくてもホタルが発生できる環境全体を守るか復元し、ホタルはその結晶だと私は再三主張してきた。

しかし、川に物を捨てる人が絶えず、周囲の土手も放っておいたら、どんどん人間の発想だけで変えられてしまう。街灯についても同じである。従ってホタルを核の一つとし、水質や天敵も許容範囲内でおさめるために、その場所では何から始めればいいのかが真の保護活動であり、この会の存在理由だと思う。

「生態系のバランスの中にホタルもいる」というクールな発想をいつも忘れないで、この会を続け発展させて欲しい。

会長就任にあたって

「ホタルを通じて環境の持つ多様な側面を考える」

日本ホタルの会会長 本多和彦

この度矢島稔会長から日本ホタルの会会長を引き継ぐことになりました。日本ホタルの会は、ホタルという日本人の心の中に深く根付いている生き物を通じて、ホタルを育む環境を維持、復元することが人にとっても大切なことであるという考えのもとに生まれました。私は、元来が化学屋で、ホタルについては素人同然ですが、矢島会長とともに、当会の発足時から運営を担当してまいりました。

ホタルと環境ということを考えるには、地域のホタルを大切にするという会員の皆さんのような立場や、私のような「水環境」からのアプローチなど、様々な切り口を持った関係者の参加が必要であると考えたからです。

これまでは、矢島先生が長年培ってこれた経験や知識をもって日本ホタルの会を運営してきましたが、私のような若輩者には到底まねできることではないと考えています。そこで、日本ホタルの会に何ができるかということのを改めて考え、何をしていくことが必要なのかを考えなければと思っています。

ホタルに関わっていこうとする立場には、「昆虫や動物に興味がある」、「ホタルが好き」、といった生き物としてのホタルを捉えた側面、「ホタルの住む環境が大切」という環境保全の側面、「ホタルがもたらす感動を子どもたちに伝える」という心の教育や郷土への愛着を育むという教育的側面など、ホタルという生き物を通じて考えられるたくさんの

側面があり、それぞれの立場で関わっている人が数多くいらっしゃるのだと思います。

私は、これらの様々な側面それぞれにおいて日本ホタルの会が果たさなければならない役割があると思っています。例えば、ホタルには多くの種が生息していますので、ゲンジボタルやヘイケボタルだけではないホタルの世界を紹介していくことが、日本ホタルの会にできることのひとつであると考えていますし、それらが生きる環境が、人が暮らす環境として大切なものであるかを考えることができると思います。ホタルの生きる環境は、ホタルのためだけでなく我々人間が生きていくうえで重要であり、人が人らしく生きていくこと、ホタルの光とともに人が生きてきたことを子どもたちに伝えていくこと、これらのことを発信していくこともホタルの会にできる重要な役割であると考えています。

偉大な先輩たちから引き継いで、これらの役割を果たしていくために、今回の役員交代におきまして、ホタルを愛し、ホタルのすむ環境の重要性の認識することでは、誰にも負けないという力強い仲間が集まってもらいました。この多様な専門性を持った方々の力が、知識も経験もない私を支えてくれるものと確信しています。それぞれの専門性を活かしながら、力をあわせて日本ホタルの会の運営に当たりたいと思います。

■新任理事プロフィール

井上 久彌（いのうえ きゅうや） 昭和16年生まれ・東京都福生市在住

◆経歴と所属

（有）アイ・エス・エフに勤務し、東京福生中央ロータリークラブに在籍しております。

ロータリークラブの環境保全の活動において、地域のこどもたちと太陽光・風・雨水を活用したビオトープでホテルの復活に取り組んでおります。

◆保全活動とフィールド

今から90年ほど前に、私の祖父が庭に多摩川を模して造った約30メートルの小川を、2000年に魚や水生昆虫が棲めるように改修、いろいろの人たちの協力により3年後にゲンジボタルの復活にこぎつけ、ロータリークラブの保全活動の原動力になっております。

◆コメント

福生市内には7つの小学校がありますが、なかでも第六小学校は繁華街にあるため周囲に森や水辺がなく自然環境に恵まれておりません。

そこで、校長先生・理科の先生との協力により子どもたち・保護者の方たちとロータリークラブの会員とで手作りのビオトープを造ろうと2004年10月から準備にとりかかり12月に工事をスタートさせました。

このビオトープは、ホテルをはじめ周囲には小鳥たちが飛び交え、いろいろな昆虫が棲めるような木々や竹が生えている校庭の場所を選定しました。

さらに、水源は校舎の屋上に降る雨水を溜めるタンクを設置しそのタンクに溜めたものを活用。その水を小川のような流れにするために水中ポンプで濾過槽に循環させるシステムですが、水中ポンプの電力の一部は校舎の屋上に設置した風力発電で賄うことで少しでも節電に努める方法をとりました。

そして6年生が卒業する直前の3月14日に無事完成、こどもたちはホテル班・気象班・電力班・植物班・野鳥班などに分かれて観測活動が続けています。

古河 義仁（ふるかわ よしひと） 東京都国分寺市在住

◆所 属

東京ゲンジボタル研究所 代表

内閣府認証特定非営利活動法人NPOホタルの会 理事

◆フィールド

東京都青梅市や奥多摩町を生態と生息環境の研究観察フィールドとし、また、ボランティアとして全国各地の保護保全活動に参加。

◆コメント

私は、1973年よりヘイケボタルの観察を始め、1977年よりゲンジボタルを中心に彼らの生態や生息環境、その地域特性等の調査に取り組んでおりますが、この30年を振り返れば、ホタルを取り巻く環境は急速な変化を続けています。ホタル保護の考え方や方法も進歩したとはいえ、自然環境の悪化に歯止めはかからず、保全や再生よりも擬似的復元を信じて止まず、ホタル保護の考え方や方法も進歩したとはいえ、生態系と切り離してホタルの数だけにこだわるなど、人間本意の「人寄せパンダ」に終始している所もあるように私は思います。

このような現実に対して、私は日本の首都・東京から、わずかに残された里山を舞台に、ホタルが自生する自然環境とはいかなるものか、そして生態系あつてのホタルであることを豊富な生態写真とともに訴えたサイト「東京にそだつホタル」を2001年に開設し、また、ホタルを通じて自然環境を考える上での指針として、2004年には、丸善より「ホタル百科」を出版いたしました。趣味として始めたホタルの研究も今ではライフワークとなり、ささやかながら「人のためではなく、ホタルのために」をモットーに活動しております。

「日本ホタルの会」は、その理念にありますように、ホタルを里山環境の象徴とし、身近な生き物が生息できる自然環境の保護・保全と再生を図ることを目的としています。真のホタル保護のための情報提供・啓蒙活動を行うことが存在意義といってもよいと思います。私の信念・信条と一致するものでございます。私は「日本ホタルの会」の理事として、これまでに得たホタルに関する知識や経験、そして革新的なWebの開発と情報発信を通じて、「日本ホタルの会」の存続とより一層の発展、そして何より自然環境の保全とホタル保護のために、微力ながら精一杯の努力をして参りたいと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

渋江桂子（しぶえ けいこ）

1968年生まれ。神奈川県在住。

◆経歴

筑波大学大学院修士課程 環境科学研究科(環境科学専攻)を経て、平成8年千葉大学大学院後期博士課程自然科学研究科(環境科学専攻)修了。同年、博士号(学術)取得。博士論文は「ホタルを指標とした谷戸の保全に関する景観生態学的研究～三浦半島野比地区を事例として～」。

専門は、Landscape Ecology。人間と自然環境の相互作用が、ホタルの生態的な関わりを通して、さらに文化的様態として形をなすに至る過程を研究した論文を発表してきた。近年は、認知科学や環境心理学的アプローチから、ホタルを切り口とした人間と農村環境との関わりについての研究も行っている。

現在は、早稲田大学・武蔵野美術大学大学院・芝浦工業大学で、『里山保全論』『環境生態学』などを教えている。

◆コメント

日本ホタルの会設立当初の理念に深く共感し、大学院生時代に会員になりました。歴代会長の日高先生、大場先生、矢島先生の引き継いでこられた日本ホタルの会の理念を全国に広め、「ホタルの生息できるような農村景観」を守っていくために皆さんとともに勉強していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局からのお知らせ

理事会報告

2006年3月25日に理事会を開催し、会則の一部改正、新役員の選任を行いました。

(会則改正の概要)

会則に、名誉会長の選任を追加しました。この条項に基づいて矢島稔前会長を名誉会長に選任しました。

2006年4月11日に理事会を開催し、山口孝さんを理事に選任するとともに、事務局体制を決定し、事務局長に井上久彌さんを選任しました。

寄付金

次の方から寄付金をいただきました。この場を借りましてお礼申し上げます。

・矢島 稔 様 (東京都)

■事務局が移転します

世田谷区代田橋から事務局を移転します。移転に伴いまして住所、電話番号が変わります。

移転日 2006年7月7日

移転先 197-0011 東京都福生市福生487 井上久彌方

電話番号 (FAXとも) 042-530-2111

事務局への連絡、お問い合わせは、原則として電子メール、FAXまたは郵便でお願いします。

ホタルのニュースレター (第37号) 2006年7月7日発行

編集 日本ホタルの会事務局

発行 本多 和彦

197-0011 東京都福生市福生487 井上久彌方

日本ホタルの会事務局

TEL & FAX: 042-530-2111

e-mail: omata@nihon-hotaru.com

URL: <http://www.nihon-hotaru.com>

印刷 文明堂印刷株式会社

239-0821 神奈川県横須賀市東浦賀町1-5

TEL: 046-841-0074 FAX: 046-841-0071

